



第 20 回

日本骨粗鬆症学会が

10月26日(金)～28日(日)に

長崎ブリックホールにて

開催されます。

当院からは

整形外科部長 人工関節センター長

リハビリテーションセンター長

内藤 浩平 先生が

学術発表されますので、ご紹介します。



高齢者大腿骨近位部骨折の受傷背景因子と手術前と術後の骨粗鬆症治療の実態について

西の京病院整形外科

内藤浩平

背景 超高齢化社会となり骨粗鬆症による大腿骨骨折は増加している。しかし、受傷前に骨粗鬆症が評価され治療が開始されている骨粗鬆症治療率は低いと報告されている。

目的 大腿骨骨折受傷前の ADL と骨粗鬆症治療治療実態と大腿骨骨折治療後の骨粗鬆症治療の実態を調査し検討すること。

対象と方法 2016 年 11 月から 2018 年 3 月までに大腿骨近位部骨折を受傷して当院で手術を行った 65 歳以上の患者 74 名を対象とした。受傷時平均年齢は 84.2 歳、男性 20 例、女性 54 例、大腿骨頸部骨折 44 例、大腿骨転子部骨折 30 例であった。この 74 例を手術方法により骨接合術群 (ORIF) 44 例と人工骨頭置換術 (BHA) 30 例の 2 群に分け、受傷場所、受傷時 ADL、受傷前の骨粗鬆症治療の有無、手術後の骨粗鬆症治療、腎機能、調査時 ADL を検討した。

結果 ORIF 群の平均年齢は 84.3 歳、平均 BMI は 21.3、受傷場所は自宅 33 例、施設 10 例、屋外 1 例、受傷時 ADL は独歩 8 例、杖歩行 16 例、歩行器歩行 7 例、車椅子移動 12 例、床上 1 例、受傷前の骨粗鬆症治療は活性型ビタミン D3 製剤 (VD) 4 例、テリパラチド製剤 (PTH) 1 例であった。BHA 群では平均年齢 84.2 歳、BMI

20.8、受傷場所は各 16 例、8 例、1 例、病院 5 例、ADL は各 2 例、13 例、5 例、10 例、骨粗鬆症治療は各 3 例、3 例、ビスホスホネート製剤 (BP) 1 例、エストロゲン受容体モジュレーター製剤 (SERM) 1 例であった。術後調査時の生活場所は ORIF 群では自宅 13 例、施設 20 例、病院 10 例、死亡 1 例、BHA 群では各 12 例、8 例、病院 7 例、死亡 3 例、調査時 ADL は ORIF 群では独歩 1 例、杖歩行 7 例、歩行器歩行 12 例、車椅子移動 24 例、BHA 群では各 2 例、4 例、8 例、16 例であった。調査時の骨粗鬆症治療は ORIF 群では VD3 例、BP5 例、PTH3 例、なし 33 例、BHA 群では各 5 例、1 例、5 例、SERM1 例、なし 18 例であった。骨密度検査 (大腿骨 DXA 法、YAM 値) は ORIF 群 58.2%、BHA 群 59.8%であった。

考察 ORIF 群では受傷前は 75%が自宅で生活していたにもかかわらず骨粗鬆症治療は 11%しか行われておらず、調査時の治療も 25%と低かった理由として施設 (病院) が 68%となっていたことが考えられる。一方、BHA 群では受傷前の自宅生活者が 53%と多数であったが、全体では 27%が骨粗鬆症の治療を受けおり、調査時自宅生活者が 40%、治療継続者も 40%と高かった。